

第1章 景観まちづくりの現状

1 対象区域

天橋立を中心とした周辺景観（景域）は周囲の山の稜線によって区切られている。

海岸線や展望台から天橋立を望む場合、その眺望景の背景のほとんどは山並みである。

雪舟の「天橋立図」や島田雅喬の「天橋立真景図」などの絵画においても、俯瞰的構図の中に山並みによって縁取られている。

宮津市及び与謝野町にわたり、阿蘇海と宮津湾の海域を取り囲む山並みの主尾根から沿岸域（陸域）及び海域を含む区域を基本とし設定する。



対象区域図

2 景観の特性

(1) 地形

丘陵は成相寺北側の鼓ヶ岳（標高 569m）を最高点として、おおよそ 150m～300m 級の山並みによって構成されている。

山林が海岸線近くまで迫っており、海岸線に沿って平地が形成されている。まとまった平地は大手川や野田川などの河口付近に見られる。

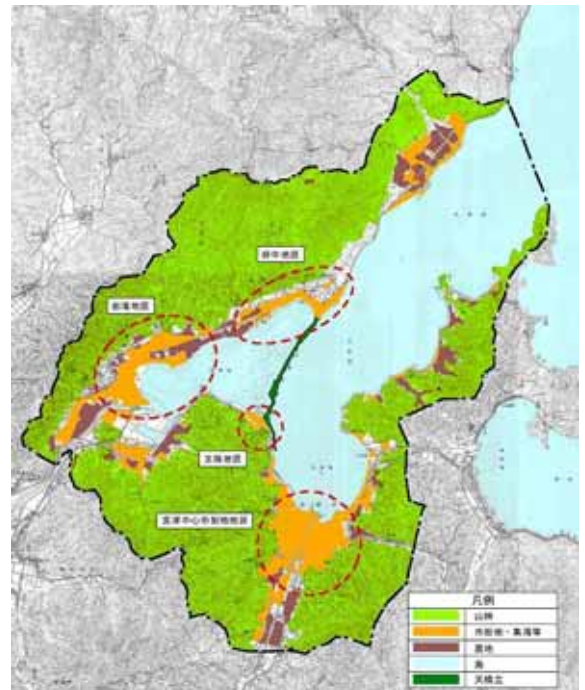
天橋立は野田川などから流出する土砂が堆積してできた全長約 3.6km の砂嘴である。4000年前、海面に現れたものと推定され、小天橋は江戸中期以降に形成されたものである。



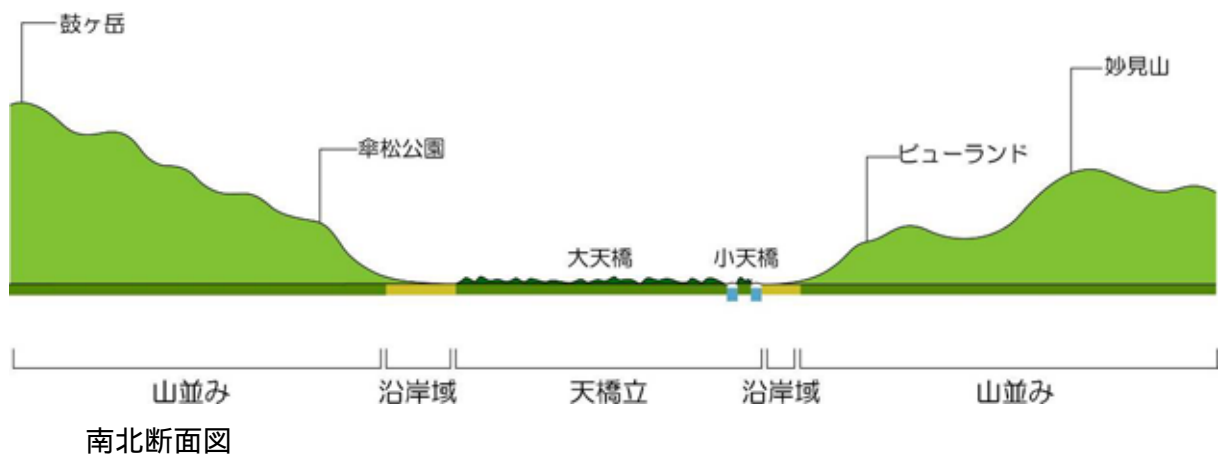
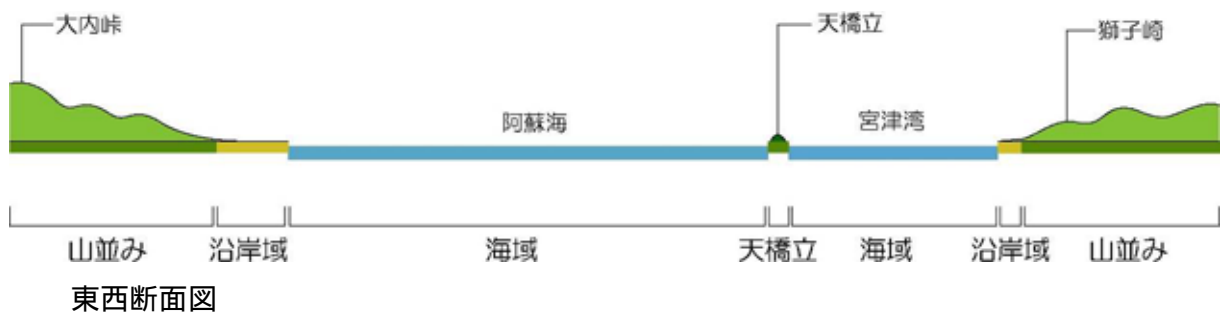
(2) 山と海と市街地の構成

山が海岸線近くまで迫っており、山裾から海岸線までの沿岸域に、コンパクトな市街地や集落が形成されている。

沿岸域に形成されている市街地や集落は、宮津湾の湾奥部の宮津中心市街地地区、天橋立が沿岸域に接する付近の文珠及び府中地区、阿蘇海西部の湾奥部に位置する岩滝地区に代表される。



土地利用等構成図



(3) 歴史文化

天橋立の歴史

1) 文化財としての歴史

天橋立や与謝海（現在の宮津湾）は平安時代には歌枕として多くの和歌に詠まれ、やまと絵に描かれる事を通じて、名所として当時広く知られた。室町時代には、雪舟がこの地を訪れて「天橋立図」を制作したほか、中世以降、周辺の社寺も含めて、名所図屏風や襖絵の題材として好まれ、多数の作品が制作された。寛永20年（1643）には、林鷲峰が「日本国事跡考」に「三処の奇観たり」と記している。

2) 維持・管理の歴史

江戸時代まで天橋立の管理主体は、文珠の智恩寺であった。松林については、周辺住民による燃料とするための落ち葉拾いや枝の伐採、風害、雪害の際の補植等が行われていたと推測される。明治以降になると、国、京都府に管理主体が移り、府立公園の指定、台風被害への対応、松枯れ対策など行政による保全のための積極的な施策や整備が進められた。

3) 歴史文化的な資源

「天橋立神社」「磯清水」等の歴史的遺構や「与謝蕪村」の俳句等、句碑や歌碑が点在しており、歴史と文化の香る場所として多くの人に親しまれている。天橋立内にあるいくつかの松は、かつてより、「千貫松」や「夫婦松」等のように、名称が付けられていた。平成6年には「天橋立の松に愛称を付ける実行委員会」により、特徴ある12本の松の愛称が募集され、それぞれの名称が決められた。



天橋立神社（橋立大明神）



磯清水（日本名水百選のひとつ）

4) 現在の利活用状況

天橋立では、その特性や知名度を生かした様々な行事が年間を通じて実施されている。長大な砂嘴を生かしたマラソンや駅伝、名所を巡るツーデーマーチのコースとしても利用されており、地域住民だけでなく、広域的な誘客のイベントも行われている。このほか、天橋立を約200本のかがり火で浮き上がらせる「天橋立 炎の架け橋」、地元住民の参加による天橋立の維持管理を目的とした清掃活動なども行なわれている。



ツーデーマーチ



天橋立 炎の架け橋

まちの歴史

丹後地域の政治・文化の中心で、江戸時代には城下町として栄えた

奈良時代の和銅 6 年(713)丹波国から別れて丹後国が置かれた。国分寺が府中であり、政治・文化の中心であった。中世においても、府中は国衙(こくが)の地として政治・宗教・文化の中心地であり、室町～戦国期には守護所の所在地でもあった。

16 世紀末細川藤孝・忠興父子が織田信長の命を受け、明智光秀とともに丹後を平定、天正 8 年(1580)8 月、丹後を与えられ入国して宮津八幡山城へ入り、まもなく平地に城を築き、城下町を開いたとされる。江戸時代に入り、細川氏に代わって京極高知が 12 万 3 千石で丹後入りし、元和 8 年(1622)になると、その子高広が 7 万 8 千石で宮津に封じられ、町の本格的な建設を始めた。その後、幕末まで近世における丹後地方の政治・経済・文化の中心的都市として発展し続けてきた。

明治 9 年(1876)、京都府に編入され、宮津支所が置かれた。明治 22 年(1889)、町村制の施行とともに宮津町ほか 10 村が誕生、昭和 29 年 6 月に宮津市が誕生、同 31 年 9 月に加佐郡由良村を合わせて今日に至る。一方、岩滝地区は、大正 10 年に岩滝町となり、平成 18 年 3 月に加悦町、野田川、岩滝町 3 町が合併、与謝野町が誕生し現在に至る。

民俗・祭と芸能

籠(この)神社の葵祭、宮津祭など伝統ある祭事が行われている。

1) 籠神社 葵祭

籠神社の祭礼は葵祭の名で知られ、その神幸には、中野、国分、大垣、江尻、小松、難波野、溝尻の各旧村から人が出て役を勤める。この村々は籠神社を総鎮守と仰ぎ、共同してその祭礼に当たっている。



葵祭 笹ばやし

2) 宮津祭

宮津地区の旧城下町は、西堀川を境に大きく東町と西町に分かれる。両地区にはそれぞれ氏神があり、東地区は和貴宮、西地区は日吉神社の氏子となっている。以前は個別に祭礼を行っていたが、現在は 5 月 15 日に統一され、同時進行のかたちで東西がそれぞれに祭礼を行っている。

地区ごとの歴史とまち並みの特徴

1) 宮津中心市街地地区

城下町としてのまち並みが形成され、町家様式の民家や教会、寺院など歴史的建造物が数多く点在している

江戸時代には、大手川の西側に町人地が形成され、海側から魚屋町、本町等六幹町に町家が集中していた。現存する伝統的な町家様式をもつ民家は万町、河原町、白柏町付近に多く分布しており、なかでも旧三上家住宅は国の重要文化財に指定されている。また、町家民家以外にも、カトリック宮津教会をはじめとした教会等の施設がみられ、洋風の作りがまち並みにインパクトを与えている。このほか、地区南西部の寺町界わいには、歴代宮津藩主の菩提寺である大頂寺や与謝蕪村ゆかりの見性寺など複数の寺院が集積している。これらのことから宮津中心市街地地区は、江戸時代、臨海部に形成された城下町を基本に、洋風の建造物も含め歴史的建造物が豊富に存在することが特徴的なまちである。



白柏付近のまち並み



旧三上家住宅



カトリック宮津教会



大頂寺



見性寺

2) 文珠地区

天橋立の入口である観光地としてのまち並みが形成され、智恩寺の多宝塔や山門など歴史的建造物が立地している。

文珠地区は天橋立への入口であり、智恩寺の門前町として栄えた。智恩寺には多宝塔や山門、文殊堂など様々な文化財が松林のなかに溶け込む形で建っており、緑と歴史的な文化財が調和した景観を形成している。天橋立の入口には廻旋橋があり、船が行き来するたびに橋が旋回する珍しい光景も見られる。天橋立駅前や智恩寺の参道には、観光客向けの土産物店や飲食店等が建ち並び、観光地としてのまち並みが形成されている。



智恩寺山門



参道のまち並み

3) 岩滝地区

伝統的様式の商家やちりめん工場を併設した民家が残っており、歴史的なまち並みが形成されている。

岩滝地区は宮津中心市街地地区と同様に北前船の西廻り航路の寄港地として江戸時代末期から明治時代中頃を最盛期として発展した。織物業の発展とともに、織物商家や織物工場がまちなかに集積しており、現在も当時を偲ばせる伝統的な様式の商家やちりめん工場を併設した民家によるまち並みが残っている。これらの建物と時折聞こえてくる織機の音により歴史ある織物のまちであることが感じられる。



沿道の伝統的な建物



まちなかに見られる山車小屋

4) 府中地区

籠神社や真名井神社、成相寺など歴史的建造物が立地するほか、天橋立に続く江尻の集落、田園の中の街道沿い集落や船屋集落など自然と関わりの深い集落が見られる。

天橋立のもう一つの入口であり、背後の山の「またのぞき」で有名な傘松公園からは、天橋立の松並木や元伊勢籠神社の鎮守の森、江尻のまち並みなどを俯瞰することができる。

籠神社や真名井神社、成相寺など歴史的建造物が立地し閑静な佇まいを有しており、天橋立を眺めることができる街道沿いには田園地帯が広がり、旧道沿いに集落や社寺が見られる。国分寺跡にほど近い阿蘇海の海岸沿いには溝尻の集落が形成されており、海側の家屋に船屋を設け中に漁船が収容されていることが特徴として挙げられる。道を隔てた山側にも同様な規模の民家が並んでおり、集落景観が形成されている。



籠神社



成相寺



傘松公園からの眺望

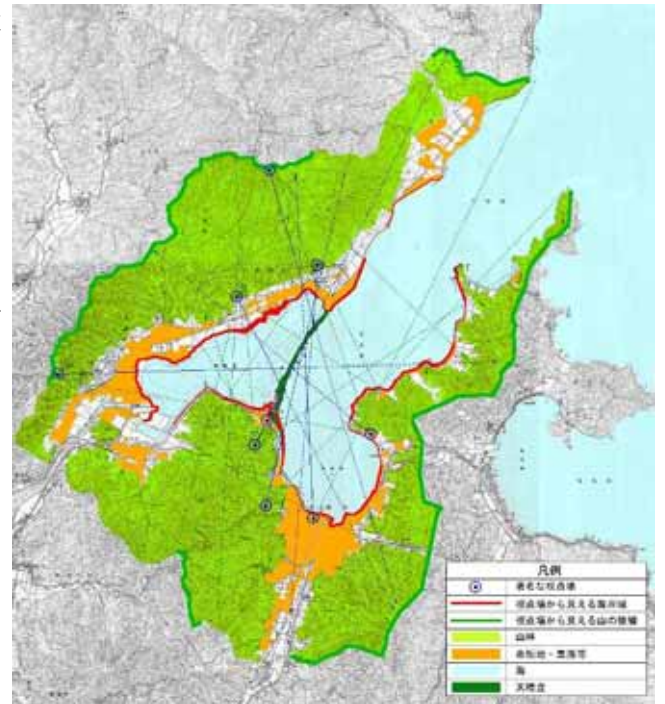


溝尻集落の船屋

(4) 著名な眺望景観の視点場

周囲の丘陵の頂や中腹には、複数の展望施設が存在しており、天橋立への眺望もさることながら、阿蘇海や宮津湾の海域、眼下の沿岸域と対岸の沿岸域及びその背後に広がる山並みを展望することが可能である。

天橋立は、日本三景の一つとされて以来、景勝地として広く世に知られるとともに、多くの人が天橋立を俯瞰することができる眺望スポットが複数ある。



著名な視点場と視対象の図

著名な眺望スポット

「天橋立周辺地域における魅力的な景観まちづくりに向けたアンケート調査（平成17年11月）」において、天橋立十景を中心とした眺望点が挙げられている。

山の頂や高台などで著名な眺望点

著名な視点場として、文珠地区の天橋立ビューランド、岩滝地区の大内峠一字観公園、府中地区の傘松公園などが挙げられる。

市街地やその周辺などで著名な眺望点

宮津中心市街地の島崎公園付近や府中地区の国分寺跡付近より天橋立を望むことができる。

そのほかの眺望点

海岸線付近を通る道路や海上航路など、移動中の車窓からも眺望することができる。

天橋立十景

昭和61年に宮津商工会議所が実行委員会をつくり「天橋立十景」を選定



天橋立ビューランドからの眺望



国分寺跡付近からの眺望

(5) 景域の構造

大景域の構造

天橋立周辺の景観構造は、天橋立を中心として阿蘇海と宮津湾を囲むように沿岸域と山並みによって構成される。

周囲の山並みの稜線によって縁取られる大景域が景観の基盤となっている。



天橋立を中心とした大景域の構造図

大景域の特徴

天橋立

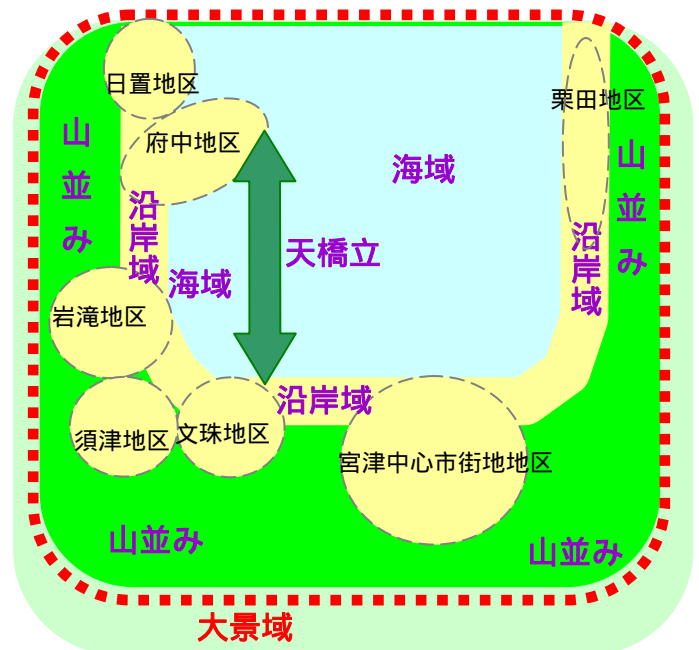
- ・大景域の背骨ともいべき景域の主軸であり、象徴的景観要素。

阿蘇海側の景域

- ・阿蘇海側の沿岸域には文珠地区を始め、岩滝地区及び府中地区の市街地が点在。
- ・府中地区から岩滝地区にかけて、海岸線に多くの田園等土地利用が見られ、その田園の中に集落が点在。

宮津湾側の景域

- ・宮津湾最奥部に宮津中心市街地が位置し、宮津湾の東岸には近年開発された戸建て住宅地や集合住宅等が点在する他、小規模な住宅地が海岸線に沿って点在。
- ・栗田半島の北端に近づくほど、集落が少なくなり自然度が高い。

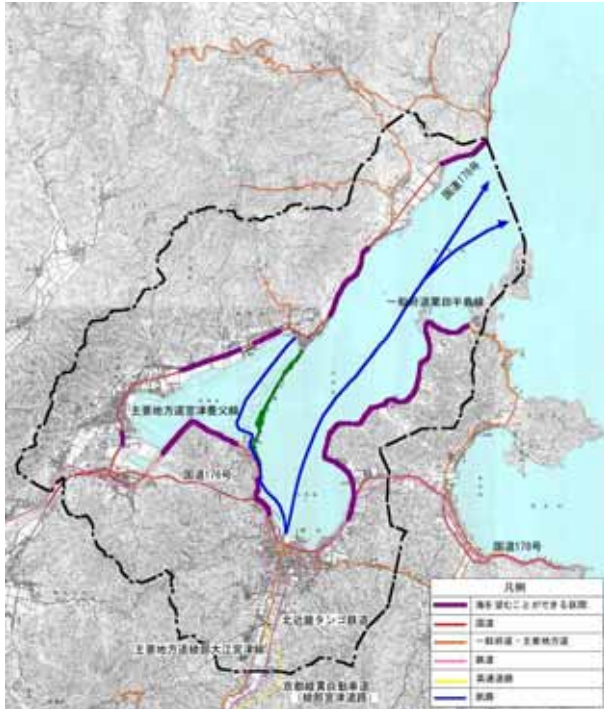


大景域の構造概念図

移動景観の構造

海沿いを通る主要な幹線道路、鉄道等路線から見える海域

- ・海岸線に沿って、主要な幹線道路国道176号と178号、阿蘇海に面して主要地方道宮津養父線が通り、文珠地区付近では北近畿タンゴ鉄道宮津線が海岸沿いを並走するなど、海への眺望が開けた区間が多くある。



移動景観（幹線道路と海上航路）



国道178号沿道（府中）から天橋立方向



一般府道栗田半島線から南方向

海域の移動景観・海上航路、観光船からみる

- ・府中地区、文珠地区及び宮津中心市街地地区を起点とする観光船が定時運行されている。この他、伊根湾巡りの観光船も運行されるなど、多くの人々が海上から天橋立や沿岸の眺めを楽しむことができる。



観光船から天橋立方向



観光船から傘松公園方向